

2-5. 側高神社のひげなで祭に見る歴史的風致

(1) はじめに

香取市内の中央部、利根川の南岸に位置する大倉地区には香取神宮の第一摂社である側高神社そばたかが鎮座している。大倉地区は、市域の中央部、下総台地の北端にある標高 40mほどの台地上を中心に集落が形成されている。北側には国道 356 号線が東西に走り、更にその北側には利根川の流れと接する。台地上は畑地、地区北側の利根川流域と南側に水田が広がる農村集落である。



側高神社の鎮座する台地



側高神社の入口

大倉地区の側高神社で古くから行われている奇祭に「ひげなで祭」がある。これは氏子による当番引継ぎの行事で、祭当番まつりとうばん（今の当番）と請当番うけとうばん（次の当番）が西と東に向かい合って座り、大杯で酒を酌み交わす酒宴が催される。まず先に、立派な髭を蓄えた祭当番が杯を空けたあと、自分の髭をなでて請当番に酒を勧めることから「ひげなで祭」と呼ばれる。酒を勧められた新当番は何杯でもこれに応じなければならず、紋付き袴姿で大げさに立派な髭をなでる祭当番の姿がユーモラスで見物客の笑いを誘う。

例年 1 月 10 日を祭日としていたが、近年は 1 月第二日曜日に改められた。当日は、氏子のみならず多くの見物客で境内は賑わい、集まった人たちには甘酒などもふるまわれる。ひげなで祭が終わると、酒の肴として用意されていた鮭や焼鮎を刺した竹串が、見物客にも配られる。

昭和 52 年（1977）に市の無形民俗文化財に指定された奇祭である。



髭をなでる祭当番

(2) ひげなで祭に関連する建造物

◆側高神社本殿 <千葉県指定文化財>

年代：寛文5年（1665）

規模・特徴：（本殿）一間社流造、銅板葺（元は柿^{こけら}葺）。正側面に廻り縁をつけ、向拝柱正面には浜縁と登り高欄付きの木階を設けている。昭和60年度・61年度に実施した保存修理工事の際に、柱などから寛文5年（1665）の墨書が確認されている。



本殿



拝殿

側高神社は、香取神宮の第一摂社とされている。摂社とは、本社と縁の深い神を祀った神社で、古来より本社の香取神宮とともに造替がおこなわれている。社伝によれば創建は香取神宮と同じ神武天皇18年といわれる。祭神は、昔から神秘あるいは側高大神とするが、天日^{あめのひわしのみこと} 鷲^{たけみかづちのかみ} 命^{ふつぬしのかみ} あるいは武甕槌神、経津主神、天兒屋根命^{あめのこやねのみこと}、姫神^{ひめがみ}を祀ったとも言われる。

神仏習合時代には字中郷の千手院（本尊は千手観音）が別当寺であった。明治41年（1908）には字石神代^{いしがみだい}にあった落書神社^{おとしぶみ}（祭神経津主命・武甕槌命）と字一夜山^{いちややま}の一夜山神社（祭神木花咲耶姫命^{このはなさくやひめのみこと}）を合祀している。ちなみに、言い伝えでは、鹿島から香取への文書をくわえた鹿が、この地で獵師によって追われ、文書を落としてしまい、責任を感じて悶え死んだ。これを祀ったものが^{おとしぶみじんじや}落書神社の起こりとしている。側高神社に南方にある落書神社跡には「落書大神之社碑」の石碑が建っている。



落書神社跡

◆ たもんてんしゃ 多聞天社

側高神社の境内にある石祠で、明治34年（1901）2月に建立されたもの。向って右側面には「明治廿四年二月建之／多聞天社」とある。側高神社では多聞天の別称である毘沙門天びしゃもんてんと称している。毘沙門天は側高神社の別当寺であった千手院の守護神であるとしている。ひげなで祭の際には、この多聞天社の前でも当番引き継ぎの行事が行われる。



多聞天社



千手院

（3）側高神社に伝わるひげなで祭

①ひげなで祭の由緒

ひげなで祭の由緒は詳らかではないが、一説にはその始まりは建保2年（1214）とも伝えられる。江戸時代の国学者、小山田（高田）おやまだ 与清ともきよが当地を旅した際の紀行文『鹿島日記』（文政5年〈1822〉刊）に「香取ノ神社のちかきほどに側高明神というあり。としごとに髭撫の祭といふことあり。そハ酒宴（ウケ）の席（ムロ）を設て。賢酒（ニゴリサカ）をくみかはし。もし口のあたりの髭なでし者あれば。しいて三杯（ミサ）のまするならハしなりといへり」と祭の様子が紹介されていることから、少なくともこの時代から側高神社で続けられている行事である。

②当番の概要

側高神社では、毎年1月初めに氏子による当番引き継ぎ行事が行われるのである。元々は側高神社の別当寺である千手院で行われていたと伝わり、いつ頃からか本社で行われるようになった。別当寺の守護神である毘沙門天（多聞天）の齋田さいでん（当番は齋田を神田〈じんでん〉と呼ぶ）を管理する当



側高神社の齋田

番の引継ぎ行事である。田は地区の北部にあり、東関東自動車道の開通により面積は減ってしまっているが、現在もその田の管理、耕作は当番により行われている。齋田にはそれを示すようなものはなく、また、耕作に係る特別な儀式なども行われない。収穫された米は売却され、当番の経費となるが、それは主に酒の購入費に充てる決まりとなっている。側高神社宮司の言によれば、かつてはその米から酒を作っていて、その名残りで現在も齋田から得た利益で酒を購入しているのではないかとのことであった。

当番は18組に分かれていて、交代で毎年引き継がれている。本来は18年に一度、当番が回ることになるが、人数が少なく当番を維持できない組などもあり、合同で当番を引き継ぐことがあるため、現在は15年に一度ぐらいで当番がまわってくる。輪番制で、大倉地区を時計まわりに当番を引き継ぐ。地区の北に鎮座する側高神社を起点として、北、東、南、西の順にまわる。なお、組は地縁ではなく血縁で構成され、一組10数軒ほどである。当頭（当番の長・本家）宅では、当番となると毘沙門天の御分霊のほこら祠が引き継がれ、一年間、これを守る役目を負う。このため、かつては当頭宅前に「不浄ふじょうの者入るべからず」などと書かれた木札が立てられていた。

当番の役目としては、田の維持管理の他に、引継ぎの際の神饌しんせんや、酒宴で用いる酒やサカナ（鮭や鮎）の調達などがある。神饌はサトイモやトコロイモ（自然薯の一種）などである。基本的にはこれらは地元の物で調達する。サトイモは地元で耕作したもの、トコロイモも地元で探す。酒は古くは地元で醸造していた濁り酒にござけを供していたようだが、味に問題があり、また食あたりの危険もあるので、近年は清酒を購入している。清酒は地区では製造していないため、近隣の佐原の蔵元の酒を使っている。酒宴では竹串に刺したサカナが多数用意される。そのサカナは鮭と焼鮎の切り身である。これも古くは利根川を遡上してきた鮭や、地元で捕れる鮎を使用していたが、近年ではそれも難しく、地元の魚屋から調達している。なお、サカナを刺す竹串は地元で用意している。



竹串のサカナ

③当番引継ぎ行事

ひげなで祭は当番引継ぎ行事であり、その中で最も盛り上がるのが「七引き合い」と呼ぶ酒宴に相当する場面である。引継ぎ行事の全体の流れとしては、まず当年および次年の当番などが参進し、側高神社拝殿に昇殿して祭典を齋行する。その後、多聞天社前で当番引継ぎを行い、それより拝殿前の庭上にて七引き合いの酒宴が行われる。

当番引継ぎ行事は、以前は1月10日と日を定めて行われていたが、10年ほど前からは1月第一日曜日と改められた。午後1時過ぎに始まり、おおむね午後3時頃にはすべての行事が終わる。

ア) 参進・祭典

参進の行列は、宮司を先頭に、幣束へいそく、神号の掛軸、毘沙門天びしゃもんてんの御分霊ほこらの祠ほらがい、法螺貝ほらがい、当年の当番（祭当番）の順となる。まず、境内社務所を出た行列は、いったん迂回して境内から一段下がったところにある正面の鳥居をくぐり、石階のぼを上って拝殿へと進む。この時、行列は法螺貝を吹き鳴らしながら進む。次の当番（請当番）は拝殿前で待ち受け、祭当番、請当番及び招待者が揃って昇殿し、祭典が行われる。当年の当番（祭当番）および次年の当番（請当番）は紋付羽織袴を着用する。



参進



参進

イ) 多聞天社前での当番引継ぎ

社殿での祭典が終わると、一行は社殿西側にある多聞天社前へと移動し、当番の引継ぎが行われる。多聞天社には神饌が供され、その前の庭上には東西に分かれて筵にござけが敷かれている。神饌には、鯉、地元で採れた野菜や果物、濁り酒などが献じられる。新旧の当番が向かい合って着座するが、その前には膳部やきふなが並べられる。膳部には、サトイモ、焼鮎やきふな、セリ、大根と鮭のなます、トコロイ

モなどが並べられる。神事のあとに、御神酒を頂戴して、短時間で引継ぎ行事は終わる。



多聞天社前



神饌

当番引継ぎ行事

膳部

当番引継ぎ行事の流れ

170

ウ) 七引き合いの酒宴

拝殿での祭典と多聞天社前での新旧当番引継ぎをつつがなく終わると、拝殿前にて「七引き合い」の酒宴が行われる。拝殿前には小さな高まりの上に松・竹・梅や鶴・亀の飾り物を配して蓬莱山ほうらいさんとしている。この蓬莱山を正面にして大きく四方を縄で区切った場所で七引き合いの酒宴が行われる。七引き合いとは、初献から始まり「一、三、五、七、七、五、一」と規定の杯数を各組交代で飲み進み、七献で終わる

まず、2人一組となって、西側に祭当番、東側に請当番が向かい合って座るが、全員が紋付羽織袴の正装で、祭当番のみが立派な髭を蓄えている（多くは付髭）。初献のみは一杯で終わると決められているが、それ以後は、規定の杯数を超えると、飲み比べとなる。例えば次の三杯をお互いに飲んだあと、祭当番が四杯目に進み、これを飲み干して髭をなでる。口元に両手を添え、上に向かって大げさに広げるユーモラスなしぐさで、これが「もっと飲め」という合図となる。請当番はこれに応じなければならない。これに対して、酒を勧められた請年番が、髭をなでるようなしぐさをすれば、お互いに三杯が追加されることとなる。これを「ひげなで三杯」とも呼び習わしている。七杯の組になると、酒豪が揃うこともあり、見物客が囃し立てる中で、何杯も杯を重ねることになる。多い時には24杯を数えることもあったそうである。



祭当番（左）・請当番（右）



髭をなでる祭当番



勧められた酒を飲む請当番



地元の少年が酒を注ぐ

杯に酒を注ぐのは当番家から選ばれた少年の役割で、かつてはこも菰かぶりの四斗樽から柄杓で注いでいたが、現在は銚子で注いでいる。杯は1合8勺が入る大きなものを使用されている。また、酒宴の場には招待客も列席し、接待係により酒が振舞われる。



招待客にも酒が振舞われる



奉納の樽酒

なお、七引き合いにはサカナとして、60 cmほどの竹串に刺した、鮭の切り身や焼鮎が多数用意されている。一杯ごとにこの竹串を当番の前の地面に立てていくため、何杯飲んだかがすぐわかるようになっている。この竹串のサカナは行事がすべて終わったあとには、境内に集まった見物客にもお土産として配られ、2本、3本とそれを手にした見物客が帰路につく姿が見られる。地元の人などの話では、持ち帰った竹串のサカナは、食することもできるが、縁起物として神棚に飾ったりすることが多いようである。



竹串のサカナ



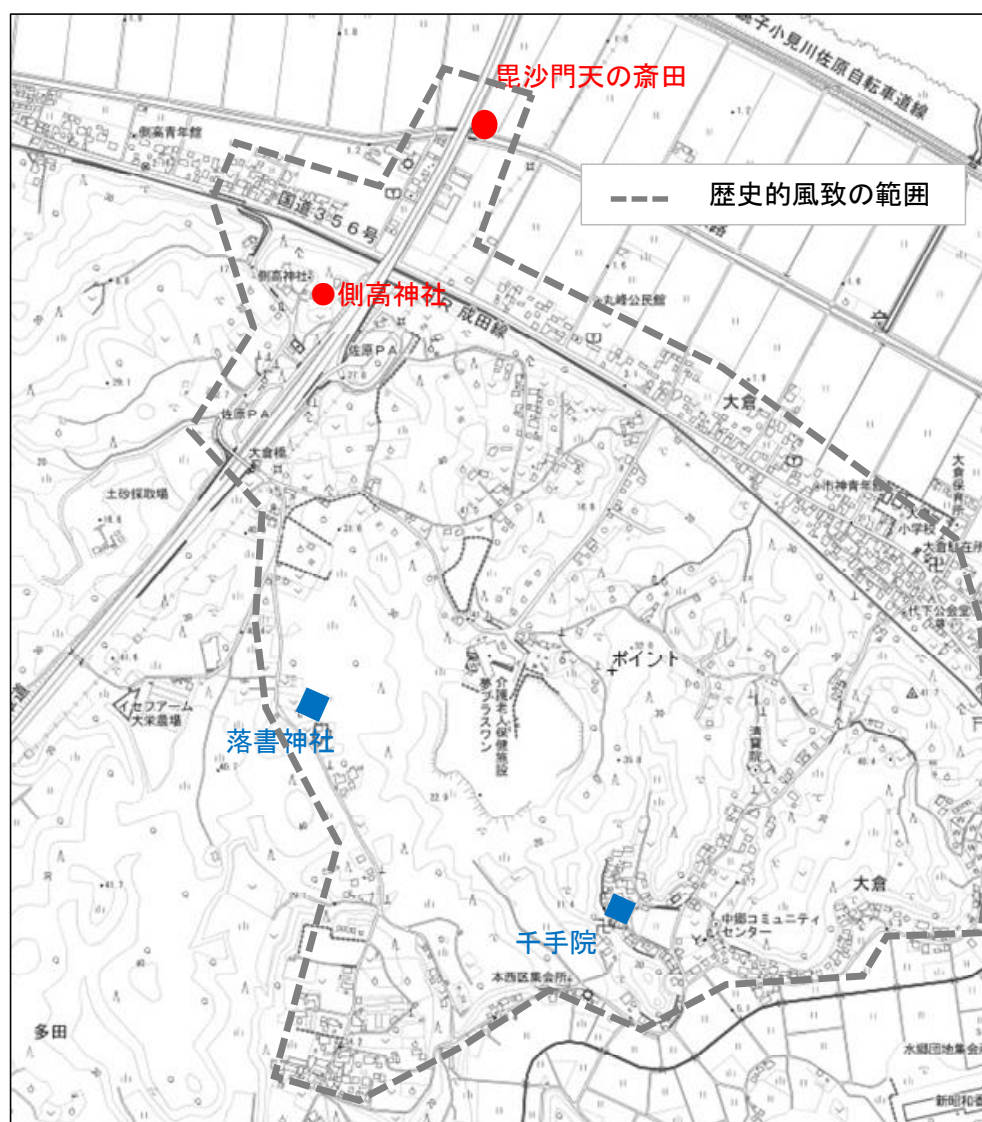
境内の見物客にもサカナが配られる



竹串のサカナを持ち帰る見物客

(4) まとめ

側高神社のひげなで祭は、氏子による当番引継ぎ行事である。当番を含めて地区の氏子の多くが参加する行事で、その範囲は大倉地区全体に広がるものである。その当番も側高神社の別当寺であった千手院の守護神である毘沙門天の田を維持管理するためのものであった。祭りに供する神饌も土地でとれる産物を用いることとなっており、今でも当番は地元からこれらを調達することを基本としている。このように古くからのしきたりを守りながらもひげなで祭は守り伝えてきており、また、ひげなで祭の終了後には、多くの参加者、見物客が竹串のサカナを手に家路につく光景が見られるなど、良好な歴史的風致を形成している。



側高神社のひげなで祭に見る歴史的風致の範囲

